

〔文献紹介〕 松本歯学 15 : 217~231, 1989

key words : 野口英世 — 伝記 — 補遺

松本歯科大学所蔵の野口英世の伝記（補遺）

矢ヶ崎 康

松本歯科大学 歯科医学史研究室

加藤倉三

松本歯科大学 歯科放射線学教室

枝 重夫

松本歯科大学 口腔病理学教室

A Supplemental Collection of the Biographies of Dr. Hideyo Noguchi in Matsumoto Dental College

YASUSHI YAGASAKI

Dental and Medical History, Matsumoto Dental College

KURAZO KATO

Department of Dental Radiology, Matsumoto Dental College

SHIGEO EDA

Department of Oral Pathology, Matsumoto Dental College

Summary

In a previous paper 142 books and journals containing biographies of Dr. Hideyo Noguchi were reviewed (Matsumoto Shigaku, Vol. 13, pp. 1—34, 1987). An additional 34 books and journals, and some old picture post cards, were subsequently added to the collection of the biographies of Dr. Hideyo Noguchi in Matsumoto Dental College. These new materials, including following valuable books, are accordingly described in this paper.

- 1) Yamazaki, H., *Medical History for Boys*. Kyoikukenyukai, Tokyo, 1933.
- 2) Ohki, K., *Educational Philosophy of Dr. H. Noguchi who is a world great man*. Kyoikujissaisha, Tokyo, 1933.
- 3) Miyajima, M., *The Eyes of Frog. Sohgaboh*, Tokyo, 1936.
- 4) Umezawa, H. ed., *Biographic Episodes of Modern Famous Doctors*. Nihon Ijisinpo-sha, Tokyo, 1937.
- 5) Koizumi, M., *Hideyo Noguchi*. Hiroshimatosho, Hiroshima, 1949

はじめに

今年3月13日の朝日新聞に“野口英世ゆかりの地に日本資金で研究所を、ペンシルベニア大浅倉教授が訴え”という見出しで、同教授がフィラデルフィア市に“野口英世記念医学研究施設”を作る運動を展開していることが報じられている。浅倉教授著の“フィラデルフィアの野口英世”(後述)という書物の純益も、そのための資金にまわされるといわれる。一方、“野口英世博士ゆかりの細菌検査室保存をすすめる会”(事務局：横浜市南区永田台27-18 小暮葉満子方)があって、横須賀にある細菌検査室の保存が計画されている。野口英世の偉大さが、今なお生き続けている証左である。

われわれは先に、松本歯科大学所蔵の野口英世の伝記ならびに関係資料118種142冊を紹介したが(矢ヶ崎他, 1987), 今回はその後に入手できた39種の資料を発表する。これらは古書店より購入したものが大部分であるが、他に野口英世記念会や野口英世博士ゆかりの細菌検査室をすすめる会の協力によるものも含まれている。

資料の記載の方法は、冊数が少ないので前回とは異なり、すべてを年代順にし、また文献番号および図番号は前回の継続とする。

野口英世の伝記

119) 東京歯科医学専門学校(編): 野口博士記念(第四講義室)。校舎落成記念誌, 174~185頁。東京歯科医学専門学校, 東京, 1930(図85)。現在水道橋に建築中の“TDCビル”の前身であるタイル貼りの4階建ての校舎ができて上がった時の記念誌である。この中に1929年秋に開催された記念展覧会の模様が詳細に記録されている。野口博士の展示は第11室B(第4講義室)で行なわれたが、その主任は福島秀策助教授であった。この記録をみると、野口英世の一生をその生立ちから死に到るまでの写真や書簡、遺品が数多く陳列され、見学者の注目を集めたようである。

120) 山崎祐久: 野口博士の黄熱病原の発見。少年医学史, 171~179頁。教育研究会, 東京, 1933(図86)。本書の口絵に、ヒポクラテスの大理石像と野口英世の写真の二葉がある(図86右)。また黄熱病原の発見は本文14章熱帯病学の進歩の2節にあり、いわゆる黄熱病原の発見の経緯と小伝が載っ

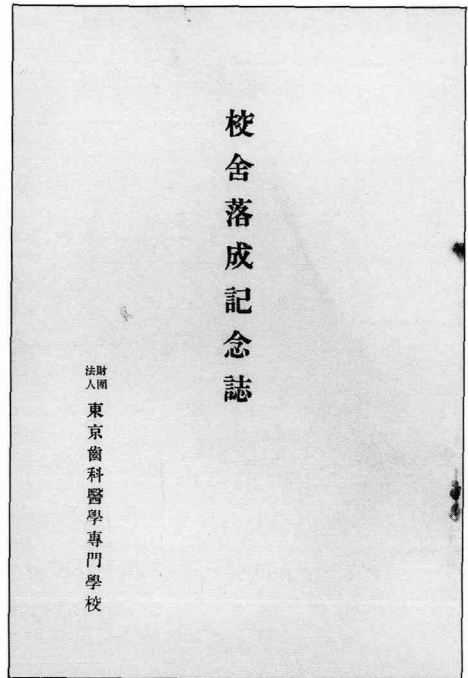


図85: 校舎落成記念誌, 東京歯科医学専門学校, 1930

ている。1933年(昭和8年)という野口の死後5年のことで、奥村鶴吉の“野口英世”(文献4)が発行された年である。従って野口が医学史に採り入れられたのは、本書が最初ではないだろうか。

121) 大木喜代之進(堀七蔵校閲): 世界的の偉人野口英世博士の教育思想, 162頁。教育実践社, 東京, 1933(図87)。序文に、校閲者の堀七蔵の他、奥村鶴吉、小林栄のものがある。野口の生きざまを通して、著者大木がみた野口英世の教育思想を展開している。第1篇、根底に立つ教育上の疑義と野口英世博士の思想; 第2篇、野口英世博士にあらわれたる師道観; 第3篇、野口英世博士にあらわれたる弟子道観; 第4篇、私塾教育と学校教育から成り、最後に略伝が付いている。なおケースに記されている“明治図書株式会社”は発行所ではなく発売所である。

122) 宮島幹之助: 学問の尊き犠牲—野口英世博士—。蛙の目玉, 143~149頁。双雅房, 東京, 1936(図88)。宮島は慶應義塾大学の教授で医学博士である。野口とはニューヨーク時代に親交があった。そんなところからこの随想集でも野口の

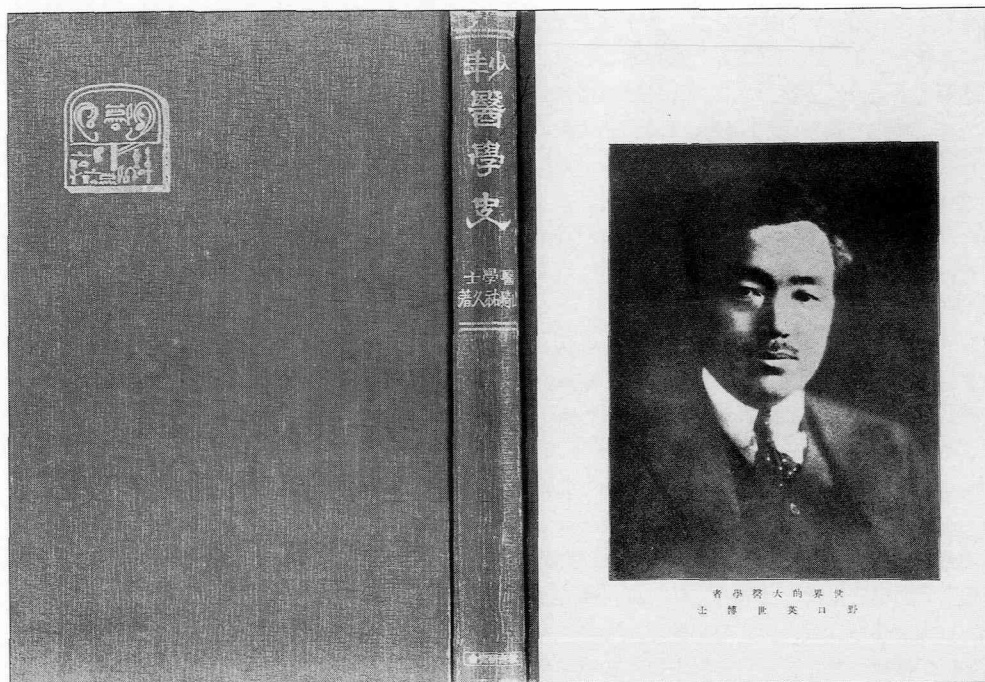


図86：山崎祐久：少年医学史，教育研究会，1933
左：表紙 中：背 右：口絵

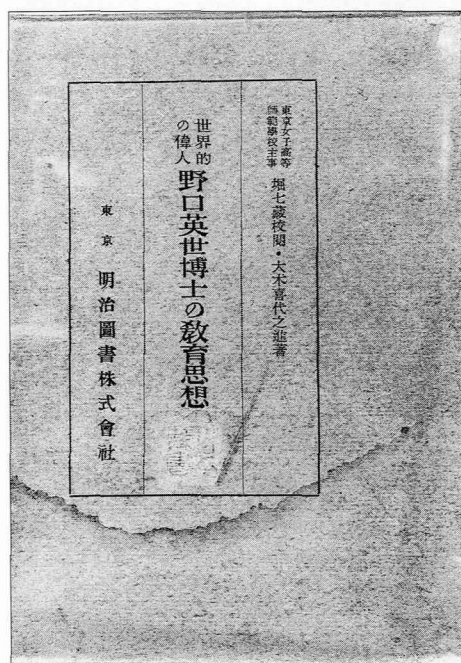


図87：大木喜代之進：世界的偉人 野口英世博士の教育思想，教育研究社，1933（ケース）
明治図書株式会社は発売所である。

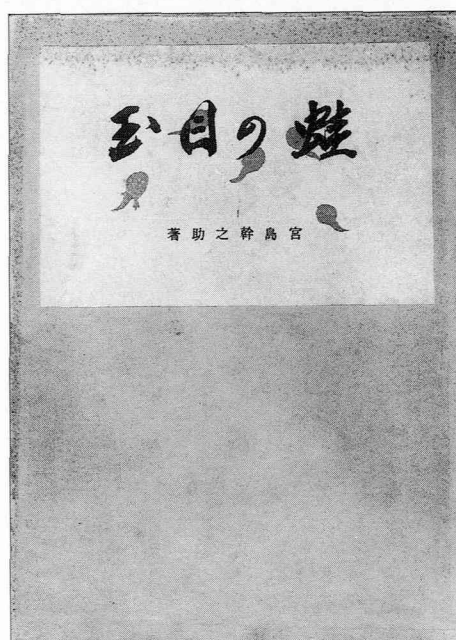


図88：宮島幹之助：蛙の目玉，双雅房，1936
（ケース）

略伝を記している。この本は紙質、装丁（天金）ともに素晴らしく、限定350部発行ということでまさに稀覯本ということが出来る。宮島は他に随筆集として「蝸牛の角」（人文書院、1938）、共訳の「大科学者の歩める道 ローベルト・コッホの生涯」（富山房、1938）を書き、さらに日本人による最初の蝶類図鑑として有名な「日本蝶類図説」（成美堂・目黒書店、1904）および「動物と人生」（南山堂、1913）などを著わしている。

123) 梅沢彦太郎（編）：野口英世先生。近代名医一夕話、307～364頁。日本医事新報社、東京。1937(図89)。北里柴三郎、森林太郎ら14名の医人について、座談会形式で思い出話を集録してある。野口については、1937年5月20日の座談会（北島多一、志賀潔、宮島幹之助、奥村鶴吉、梅沢彦太郎ら13名出席）と同年7月21日の追悼会（小林栄、北島多一、血脇守之助、宮島幹之助、奥村鶴吉、星一、石塚三郎ら17名出席）の記録と、野口の写真、小伝が掲載されている。なお本書は1988年10月17日、来学された神奈川歯科大学中村澄夫氏から頂戴したものである。

124) 石川光昭：「Noguchi」を讀みて。限部一

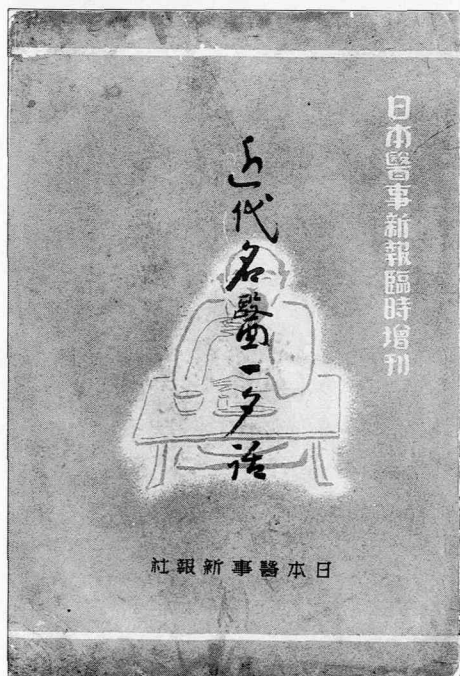


図89：梅沢彦太郎(編)：近代名医一夕話。日本医事新報社、1937



図90：中 貞夫：世界の細菌学者たち。柴山教育出版、1941（文部省推薦図書の帯）

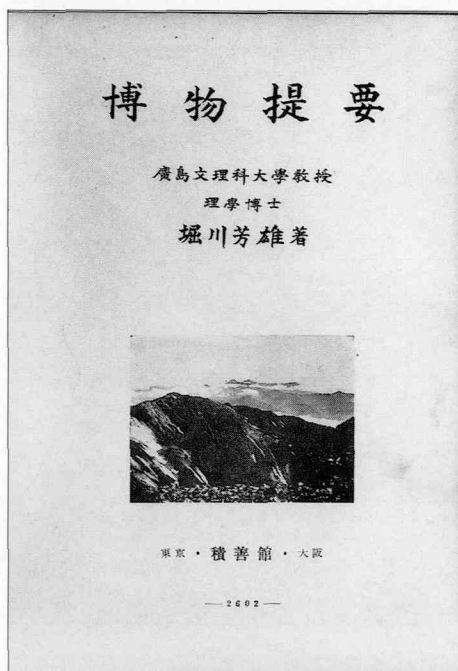


図91：堀川芳雄：博物提要。積善館、1942（扉）
（下の2602は紀元の年号）

〔6〕 熱帯病を媒介する蚊 人類特に文明先進国民の熱帯地方の征服・開拓・文化の発展の歴史の裏面には熱帯地方特有の風土病（マラリア病・黄熱病・デング熱など）との悲惨な苦闘史が書き記されてゐる。

マラリア病はその病原蟲がハマダラカによつて媒介せられ、人體の赤血球内に入つて盛に分裂し、この時患者は高度の熱を出す。而も發熱する時期が規則正しく繰返され、周期的な波を作つてあらはれる。マラリア病原蟲の生活史の研究完成は全く科學の勝利であつて、今日は「キニーネ」の服用により治療法が進歩してゐる。デング熱の病原體は今尚ほ不明であるがネツタイシマカによつて媒介されることは明らかになつて來た。熱帯・亞熱帯の諸地方に多い我が版圖内では南洋群島に流行し、臺灣及び琉球にも時折流行して人民を苦しめた。この病氣に罹ると一定の潜伏期を置いて急に40度以上の高熱を發し、眼球や腰に痛みを覺え、全身に發疹するが死亡率は低い。ネツタイシマカに媒介されるものに黄熱病があり、死亡率が高く、今は南米の一部と西アフリカとに限られてゐる我が版圖内には發生しない。

故野口英世博士は晩年十數ヶ年の年月を黄熱病の研究に捧げ、アフリカ・マダラに於て研究中それらに感染し、遂に昭和三年五月學に殉ぜられた。黄熱病の研究の完成を見ないで逝かれた事は痛惜の極であるが、病原體を明らかにし、研究の進むべき方向を明示した業績は尙ほ偉大である。



〔147〕 故野口英世博士

博士は米國ニューヨークのロックフェラー醫學研

究所にて、蛇毒・霍毒・トラホームを始め、中・南米に發生する種々の熱帯病の研究に力を盡された。これらの業績は醫學に貢獻する事多大で、日本が世界に誇り得る學者であつた。

過去の熱帯地方開拓經營の歴史は熱帯病の悲惨な歴史を傳へてゐるけれども、熱帯醫學や生物學の進歩した今日徒らに風土病に驚異を感じ、恐れ込んで、熱帯地方への躍進をためらつてはならない。國民全體が熱帯病に對して正しい關心をもち、知識を得て、豫防・治療法を辨へ、自然の作爲する大障壁と雖も大勇猛心を發揮して敢然と乗り越え、東亞共榮圈の真建設に翼賛し奉らなければならぬ。

〔7〕 農作物を害する昆蟲 イネや蔬菜や果樹を始め農作物に害を及ぼす昆蟲は非常に多く、その被害は年々夥しい額に上つてゐる。この有害昆蟲には成蟲のみ有害なもの、幼蟲期のみ有害なもの、成蟲・幼蟲共に有害なものがあり、種類によつて夫々違つてゐる。害蟲の豫防・驅除に當つてはこの點をよく辨へて置かないと正鵠を失ふ。

日本ではウンカ・ズキムシ・バツタ・イナゴはイネ、カヒガラムシ類は果樹、アリマキ類は園藝植物の最大害蟲である。共に恐ろしく速い繁殖力をもつて殖えて行くので、一旦發生するとその害も夥しいことになる。モンシロチョフ・キタテフの類・コガネムシの幼蟲が蔬菜を害し、カミキリムシの幼蟲やザウムンが樹木や果樹を荒し農家や園藝家を悩ます。

〔害蟲の驅除及び豫防〕 害蟲の發生した場合には最も速かに、最も有効な方法によつて驅除しなければならない。誘蛾燈や器具を用ひて害蟲を捕へて殺し、水を灌漑して害蟲を窒息させ、果實に袋を掛けて害蟲を防ぐ事から、石灰ボルドー液・銅石鹼液・石油乳劑・除蟲菊石鹼水・硫黄粉・硫黄ニコチン・ダリス石鹼等の藥劑をまいて機械的に驅除する。又トンボ・テントウムシ・ヤドリバチ等の如く害蟲を斃す昆蟲(所謂天敵)や益鳥を保護して間接的に驅除することも甚だ大切である。國際

図92：堀川芳雄：博物提要の242頁（左）と243頁（右）

雄，林麟，太田千鶴夫(編)：科学者，184～191頁。ラヂオ科学社，東京，1939。野口の伝記の双璧といわれる奥村本(文献4)の書評ないし読後感想については、前回、岩波書店が発行した一枚物を複製して示したが、もう1つのエクスタイン本(文献5)の読後感想文を発見したのでここに紹介する。本書では、まず著者エクスタインについて記し、書評として“野口博士の生ひ立ちからアフリカに遠逝するまでの生涯を描いてゐるこの著述の特色は、いはゆる完全なる学究として彼を造りあげずに人間らしき悩みを悩める科学者としての彼を現はしてゐるところにある。”と述べている。また“エクスタインの文章は洗練の美を欠くが卒直であり、その記述は簡明である。しかし、日本語をそのまま羅馬字で現はし脚註もつけずに使用してゐるところや、日本語をあまりに直訳しすぎてゐるところなどは外国人をしてその意味の捕捉に苦しませるであろう。たとへば Jinjoshogakko, Irori, Musubi, Shoji, Yokomoji, Kannon, Kyucho,

Tembo, Tatami, Akirameta などと書いたり、七星霜といふ意味であるらしいのを、Seven stars and seven frosts と訳したりしてゐるところなどは頗る難解であると考へられるのである。”と書かれているところから、かなり詳細に読んでゐることが判る。なお、著者石川は、慈恵会医科大学の教授である。

125) 中 貞夫：野口英世博士—日本が生んだ医学界の巨人、人類の大恩人 世界の細菌学者たち、259～300頁。柴山教育出版、東京、1941(図90)。背および扉に小さく“学生科学者伝記”と記されているように子供向けのものである。レーエンフック、スパンランツァニ、パスツール、コッホ、リード、北里柴三郎、エールリッヒ、野口英世の順で略伝が載っている。

126) 堀川芳雄：熱帯病を媒介する蚊。博物提要、242～243頁、積善館、東京・大阪、1942(図91, 92)。博物とは、動物、植物、鉱物の総称であるが、動物の中の昆虫についての説明“第15章 虫

の生活研究, [6]熱帯病を媒介する蚊”において、
 ネットイシマカによる黄熱病に関連して野口英世
 の小伝と顔写真がある、この種の書物に登場して
 いることに驚いた次第で、とくに全文を複製紹介
 することにした(図92)。

127) 寺島 柂史：野口英世の世界的業績。世界的
 な日本科学者, 239~274頁。泉書房, 東京, 1944(図
 93)。著者寺島は前回紹介した“日本科学者物語”
 (文献35)の著者と同じである。本書では北里柴
 三郎, 高峰讓吉, 田中館愛橘, 石川千代松, 三好
 学, 長岡半太郎, 野口英世の7人にしぼり, それ
 ぞれの業績を中心に伝記を書き進めており, 野口
 についても“彼の海外における28年間の努力時代
 のあらまし, 特にその業績に就いて叙べ”ている。
 敗戦のちょうど1年前の昭和19年8月15日に発行
 になったもので, 紙質, 製本ともに悪いが珍本と
 いえるだろう。

128) 小泉 丹：野口英世, 178頁。広島図書,
 広島, 1949(図94)。小泉は, 岩波新書の“野口英
 世”(文献28)および“野口英世〔改稿版〕”(文献
 29)の著者でもある。本書は後者(改稿版)と同
 年に発行されており, 子供向けに書かれたもので

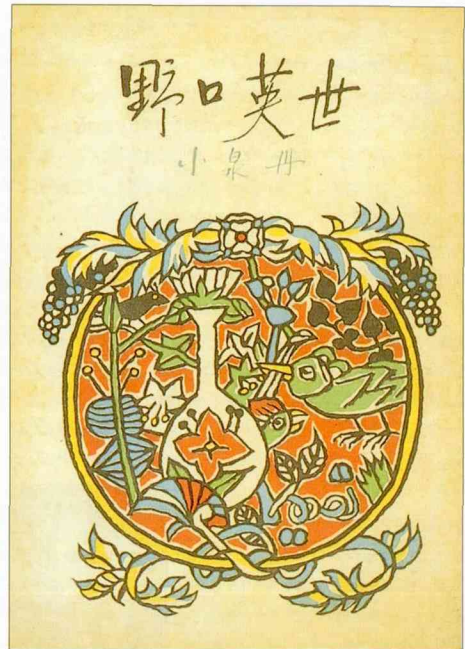


図94：小泉 丹：野口英世。広島図書，1949

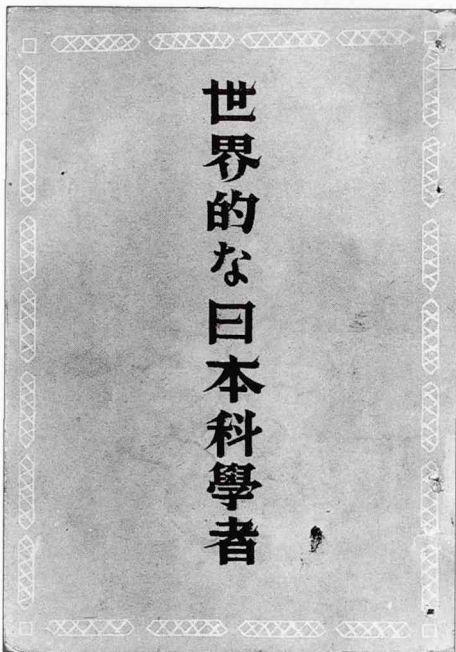


図93：寺島柂史：世界的な日本科学者。泉書房，
1944

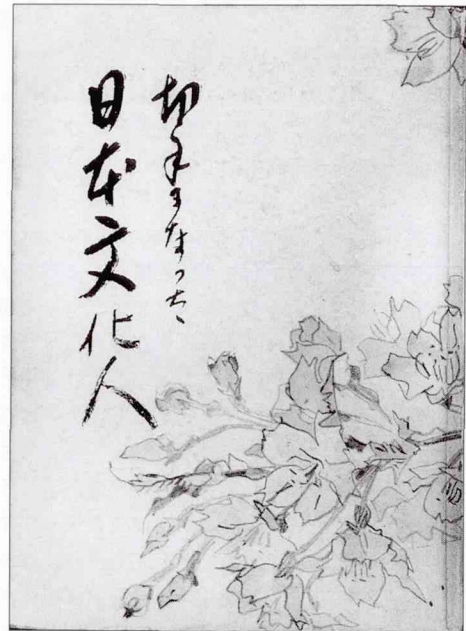


図95：高久 茂（編）：切手になった日本文化人。
 一二三書房，1953（ハード・カバー）

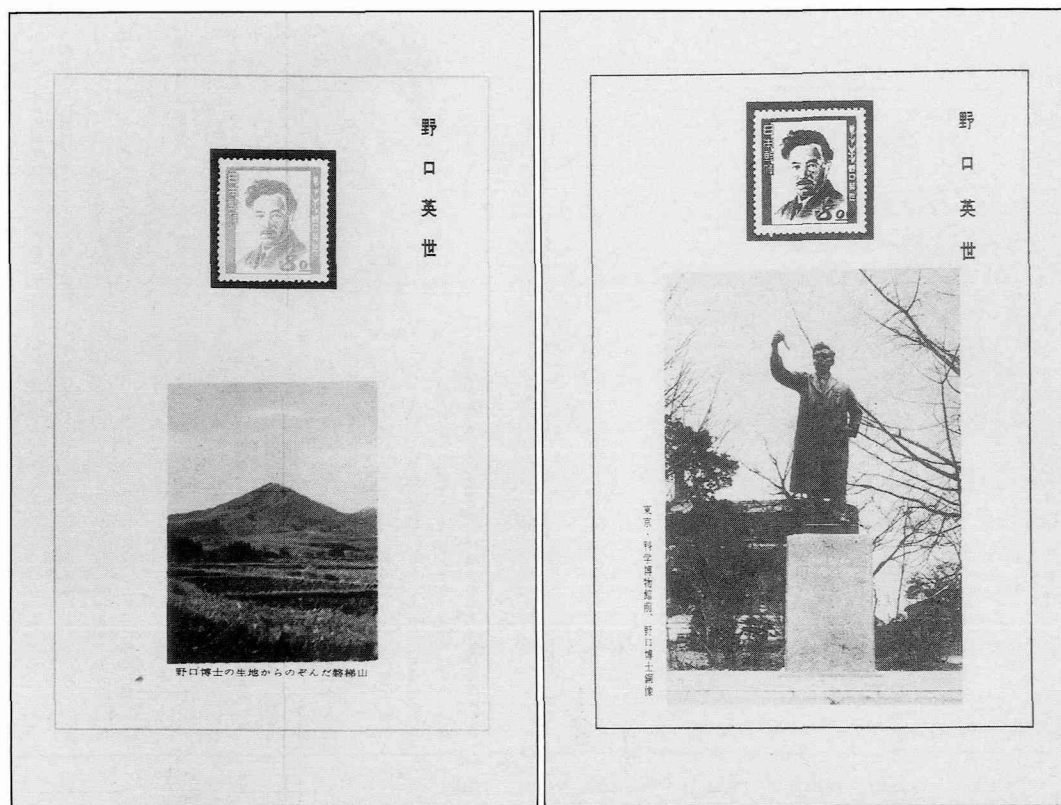


図96：高久 茂(編)：切手になった日本文化人の口絵

左：1953年版，下は磐梯山（カラー）

右：普及版，1954年，下は野口の銅像（モノクロ）

あるが内容はしっかりしている。戦後間もなく、しかも広島市で発行されたのであまり知られていない。なお銀の鈴文庫 伝記・創作篇13に属している。

129) 高久 茂(編)：切手になった日本文化人，254頁。一二三書房，東京，1953(図95, 96)。前回紹介した普及版(文献41)の1年ほど前に出版された。内容は普及版と同様であるが，体裁が普及版のペーパー・バックに対しハード・カバーである。また口絵は本書ではカラーで切手の下の写真は磐梯山であるが(図96左)，普及版ではモノクロームで下は野口の銅像(上野科学博物館)である(図96右)。

130) 湯浅光朝：野口英世の梅毒スピロヘータの純粹培養。科学五十年，109～111頁，時事通信社，東京，1956(図97)。初版は1950年に発行されたが紙質が悪い，本書は増補改定版である。第4

章 明治時代の科学者とその業績 第8節 医学の中に野口が登場している。著者は野口の業績から梅毒スピロヘータの研究を採りあげ，奥村本(文献4)から引用してそれを紹介している。

131) 星 新一：明治・父・アメリカ，232頁。筑摩書房，東京，1975(図98)。星 新一の父が星一で，野口の経済的援助者であったことは前回記した通りである(文献3，55)。従って本書にも，星一と野口とのフィラデルフィアにおける遭遇(178～183頁)，野口の帰国に際して5,000円を送金したこと(231～232頁)など随所に野口が出てくる。

132) 星 新一：明治・父・アメリカ，243頁。新潮社，東京，1978(図99)。前書の文庫版である。末尾に小島直記の解説がある(237～243頁)。

133) 奥村鶴吉：復刻 野口英世，680頁。野口英世記念会，東京，1976(図100)。本文(1～657

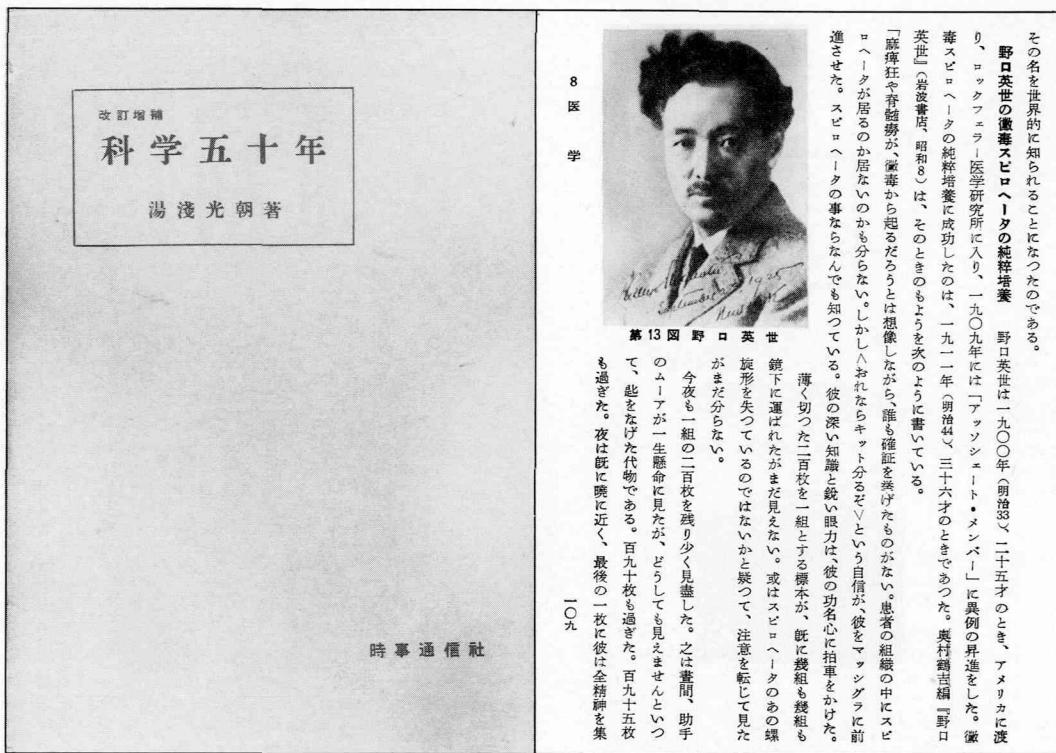


図97：湯浅光朝：科学五十年，時事通信社，1956 左：ケース 右：109頁



図98：星新一：明治・父・アメリカ 筑摩書房，1975

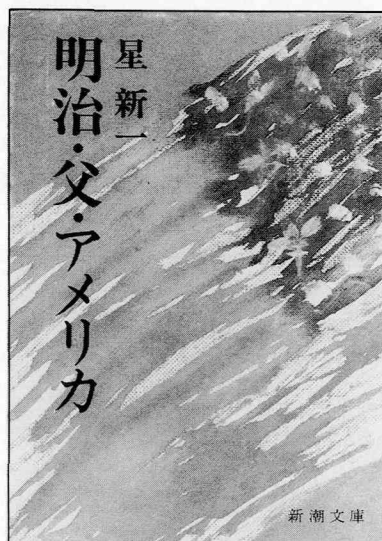


図99：星新一：明治・父・アメリカ 新潮社，1978（文庫版）

頁)は1933年11月5日発行の第3刷を元版として復刻している。さらに巻末に“奥村鶴吉編「野口英世」復刻出版にあたって”(20頁)があり、本書が野口英世誕生百年を記念して復刻出版されることになったこと、本文(1~657頁)は第3刷、追録(658~680頁)は第12刷を使用したこと、改訂第八刷序、正誤解説、補遺などが記されている。本書の出版にあたり、東京歯科大学米澤和一名誉教授(当時、現在故人)が協力したことを知り喜ばしく感じた。欲をいえば、口絵は第8刷(以降)を復刻した方がよかった。何となれば、前回にもふれた如く(文献4)、口絵冒頭の石膏像の写真よりも、奥村がニューヨークで野口から贈られた肖像写真の方がはるかにいいと考えるからである。しかもその石膏像はその裏に載っているのである(第1~7刷では裏白)。また前述の如く本書の追録は第12刷から復刻したとあるが、ウッドローンの墓碑の写真(658頁)は全く別のものである。そしてこれは著者らが保管している戦前の絵はがきの写真(図101④)に、バックはエアブラッシュで消してはあるが、酷似している。

134) 市場泰男:野口英世はほんとうに黄熱病の病原体を発見したか。素顔の科学史99の謎 教科書にもない真実のドラマ, 36~37頁。産報ジャーナル, 東京, 1977。これには野口の小伝と、黄熱病の病原体としたレプトスピラは誤りであったことが記されている。そしてその本体は“磁器製の濾過器をもすりぬけてしまうウィルス”であると解説しているが、“素焼”が正しい。

135) 中原和郎, 丸山工作:ロックフェラー研究所で一野口英世のことなど。丸山工作(編):夢と真実 生物学者は語る, 74~77頁。学会出版センター, 東京, 1979。本書は丸山工作が6人の生物学者と対談し、“科学”や“化学と生物”などに掲載したものをまとめたものである。中原和郎との対談記事は2人目“がん研究に生きる—中原和郎博士に聞く—”, 47~96頁にあり、“野口英世のことなど”はその中の小項目である。中原がロックフェラー医学研究所につとめていた1918~1925年と野口のロックフェラー時代1904~1928年とが7年間(中原の全期間)ダブっているところから、中原は野口の印象として“彼はたいへん焦っていた。”“(フレクスナー研究所長に)しばしば尻をはたかれたこと”などを話している。

136) Plesset, I. R.: *Noguchi and His Patrons*. pp. 1-414. Associated University Presses, Inc. Cranbury, 1980 (図102左)。前回、本書の日本語訳“野口英世”(星和書店, 1987。図102右)を紹介したが(文献62)、今回やっと原書を手に入れることができた。原書と訳書のカバー版画(齊藤 清)は同じである。原書の方には表題に“Patrons”が付いており内容に忠実である。なお訳書のまえがきに“原著の出版は1981年である。”と記されているが、1980年の誤りであることに気が付いた。

137) 大森久光:ウッドローンの墓地に眠る日本人—現地でも思う野口英世像一。25頁。野口英世記念会, 東京, 1982。ニューヨークのウッドローン墓地の案内書であるが、野口の間像や略伝も記されている。発行日付がないので、中村敬三会長の序に1982年5月21日と記されているところから1982年発行と推定した。またこの小冊子の表紙には“ニューヨークに眠る野口英世”とあるが、書誌学的には扉の方が優先されるので扉の表題を用いた。

138) 渡辺淳一:遠き落日, 上, 下, 316頁, 322頁。角川書店, 東京, 1982 (図103)。前回紹介した四六版(文献46)の文庫版である。下巻314~319頁に郷原宏による解説がある。面白いのはそのカバーで、初版では“落日”の風景であったが(図103上段)、再版(1985年刊)からは、四六版の意匠に野口の肖像画を配したものに変更になった

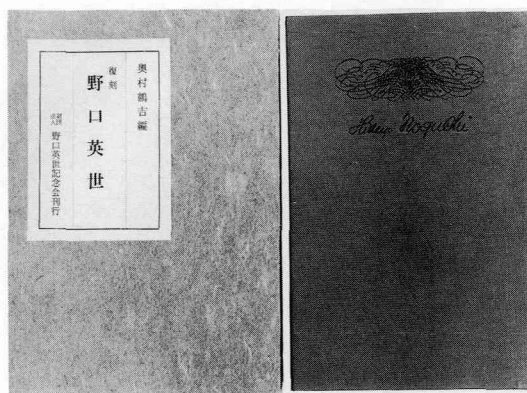


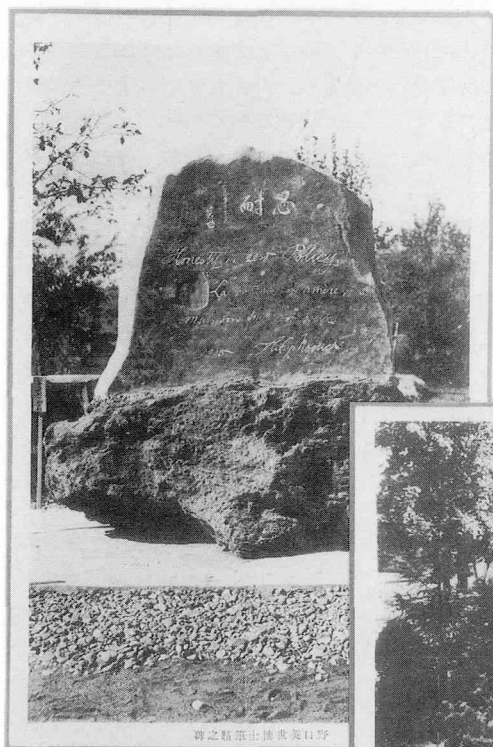
図100:奥村鶴吉:復刻 野口英世。野口英世記念会, 1976
左:ケース 右:表紙



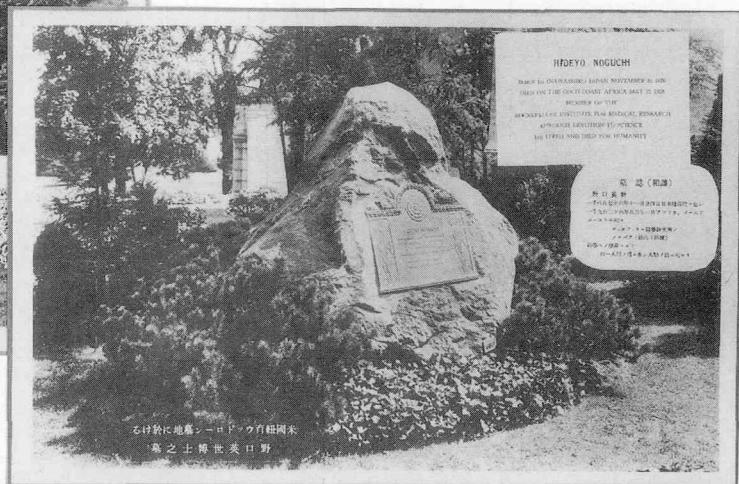
①野口英世博士生家ト記念碑ノ全景



②野口英世博士誕生地記念碑



③野口英世博士筆蹟之碑



④米国紐育（ニューヨーク）ウッドローン墓地に於ける野口英世博士之墓

図101：野口英世記念絵はがき（戦前のもの、千鳥印）

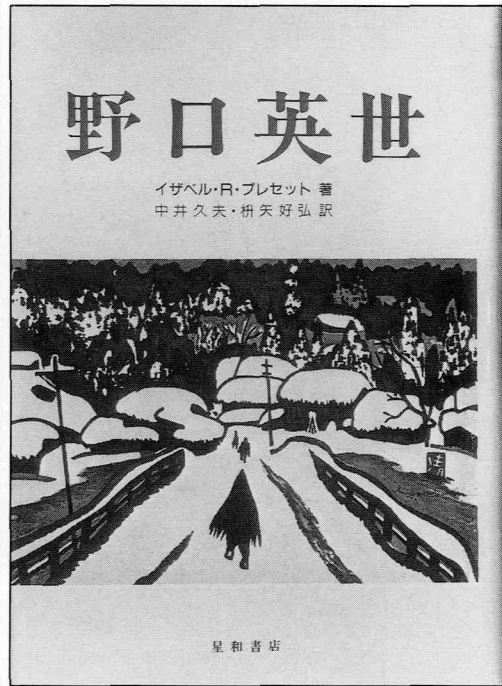
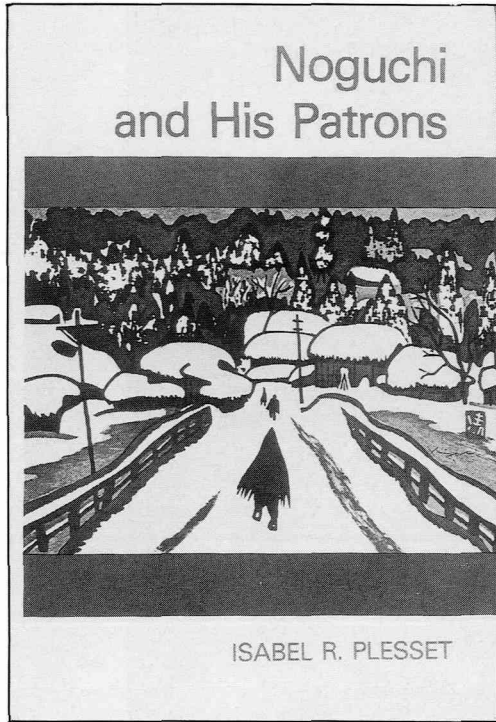


図102：左：Plesset, I. R.: *Noguchi and His Patrons*. Ass. Univ. Presses, 1980
 右：プレセット著，中井・枡矢訳：野口英世，星和書店，1987

(図103下段)。ところがよく調査したところ，上巻には初版でもこの改定カバーのものがあリ，さらに再版にも落日カバーが付いているものがあることがわかった。下巻にもこのようなバリエーションがあるかどうかを調べているがまだ見つかっていない。

139) 野口英世記念会(編)：日本が生んだ世界の医学者 野口英世，76頁。野口英世記念会，東京，1985(図104)。奥付に“本図録は昭和56年に行った野口英世展のため作製した図録を再編集したものである。”と記されている。写真や手紙類を多く採り入れてあり眼で見る伝記といふことができる。滑川道夫，関山英夫，中山茂，渡辺淳一の各氏も寄稿している。

140) 竹崎有斐(文)，高橋信也(絵)：野口英世。本郷左智夫(編)：偉人物語。下巻，30～37頁。学習研究社，東京，1985(図105)。冒頭に“手に大やけどをおってもくじけなかった，野口英世の子どものころのおはなしです。”とある。子供向けの

絵ものがたりであるが，顕微鏡の絵はおかしい。

141) 吉水卓見：ブラジルの野口英世—野口英世の足跡を求めて—，37頁。野口英世記念会，東京，1986(図106)。本書は野口が1923年11月末から翌年3月初めまでの約3か月余ブラジルを訪れていることを紹介している。それを今なお証明しているものとして，リオ・デ・ジャネイロ市の“野口通り”，サルバドール市バイア大学医学部の“野口英世のレリーフ”と同ゴンザロ・モニッツ中央研究所の“野口英世の写真”と“Laboratorio Prof. Noguch”(野口教授研究所)の銘板，カンピーナス市の“野口広場”と“野口英世の胸像”があることを記し，さらにリオ・デ・ジャネイロで出版されたポルトガル語の伝記があることを図示している。また23～35頁には丸山徹，丸山めぐみ夫妻によるポルトガル語訳が付いている。なお奥付に発行日付がないが，野口英世記念会報，No. 32，p. 6 1987によると，本書は1986年5月21日(博士の命日)に発行されたものである。



図103：渡辺淳一：遠き落日（文庫版）。角川書店
 上段：初版 上，下，1982
 下段：再版 上，下（帯），1985

142) 渡辺淳一：遠き落日。遠き落日，長崎ロシア遊女館，3～401頁，講談社，東京，1987(図107)。前回（文献46）と今回（文献137）の“遠き落日”が，講談社の“日本歴史文学館”に編入され，通し番号34になった。末尾（545～578頁）には，“対談 野口英世の栄光と悲劇”があり，渡辺淳一と郡山市本多記念病院 本多憲児院長の対談が載っている。さらに別冊付録“歴史文学ハンドブック”があり，野口の写真を初め，彼をとりまく人々の写真や，本文の中に出てくる用語の解説などがあ

る。

143) 神戸淳吉（文），吉井忠（絵）：野口英世，297頁，講談社，東京，1987(図108)。青少年女伝記文学館全24巻の第20巻（第1回配本）として発行になった。その名前の通り子供向けのもので，別冊付録として530人を収録した“世界人名事典”がある。なお神戸淳吉の野口の伝記として，前回3種（文献98～100）を紹介してある。

144) 浅倉稔生：フィラデルフィアの野口英世，223頁，三修社，東京，1987(図109)。本報の冒頭



図104：野口英世記念会（編）：野口英世，1985

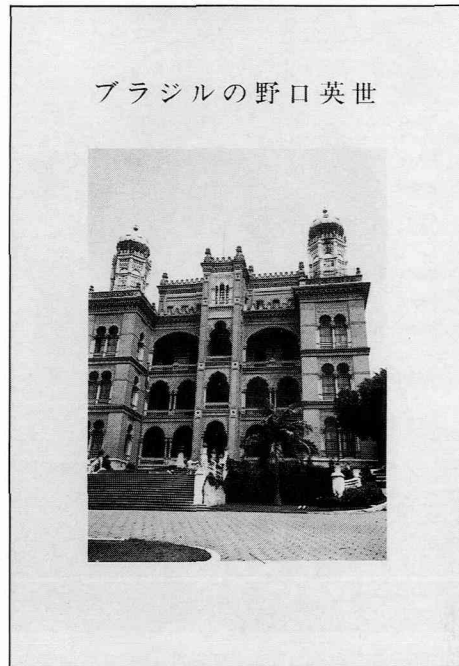


図106：吉水卓見：ブラジルの野口英世，野口英世記念会，1986



図105：本郷左智夫（編）：偉人物語（下巻），学習研究社，1985（帯）

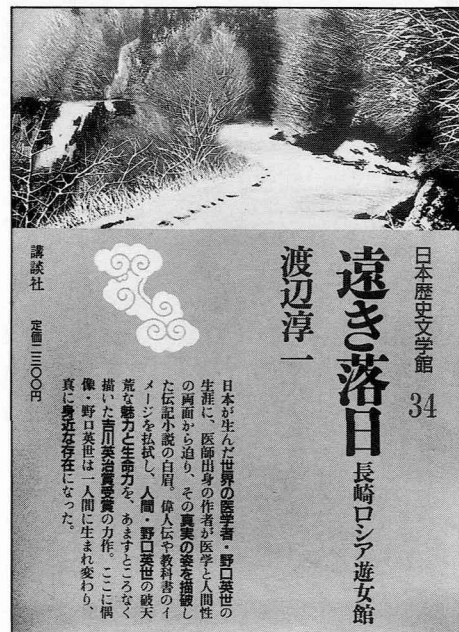


図107：渡辺淳一：遠き落日，長崎ロシア遊女館。講談社，1987（ケースカバー）



図108：神戸淳吉（文），吉井忠（絵）：野口英世，講談社，1987（帯）



図110：野沢 敬（編）：科学者・探検家120人物語，朝日新聞社，1989（帯）



図109：浅倉稔生：フィラデルフィアの野口英世，三修社，1987（帯）

に述べたように、著者はフィラデルフィア市にあるペンシルベニア大学の教授である。そこで野口がアメリカで最初に研究したペンシルベニア大学内の研究室や文献資料を調査して、野口のフィラデルフィアでの生活を明らかにし、さらにさかのぼって野口の出生からの伝記を認めたのが本書である。若い頃、フィラデルフィアで学んだ4人の偉人として、野口英世、津田梅子、新渡戸稲造、内村鑑三を挙げている。東京歯科大学の第3代学長（校長）で“野口英世”（文献4）の編者でもある若き奥村鶴吉もペンシルベニア大学で学んでいることを付記しておきたい。

145) 家庭犬広報室：犬を愛した人たち（後），家庭犬，379号，5～7頁，1988。この最初に“野口英世の愛犬”の項があり，その中に“黄熱病の研究途上，ガーナのアクラで博士が斃れると，遺骸はニューヨークに移され，日本倶楽部で葬儀が行われました。そこへ泣きながら飛びこんで来た婦人があった。婦人は連れて来た犬をしっかり抱きしめて泣いていました。……”と記されている。その犬は野口のペットで，アクラに出かける時，この婦人助手（メリー夫人ではない）に預けられ

ていたのであった。この種類は日本産の“狛”と
のことである。

146) 野沢 敬(編):野口英世 二八年間の海外
研究生活で大きな成果。科学者・探検家120人物
語—世界と日本の人物科学史—, 66~67頁。朝日
新聞社, 東京, 1989 (図110)。表題の120人とは、
日本の科学者50人, 世界の科学者50人, 東西の探
検家20人である。子供向けの本で、野口の“梅毒
の研究”(黄熱病ではなく)をとりあげているのは
いい。A J B朝日ジュニアブックシリーズの1つ
である。

147) 伊藤智義(作), 森田信吾(画), 野口英世。
栄光なき天才たち, No. 4, 88~165頁, 集英社, 東
京, 1989。北里柴三郎, 山極勝三郎, 野口英世,
P. T. タッカーの4名の略伝がイラストで記され
ている。ヤングジャンプ・コミックスの1つであ
る。

あとがき

以上29種34冊の野口英世に関する資料ならびに
戦前の絵はがき(4種)を記載した。前回の報告
後2か年あまりでこれだけ集めることができたこ
とは幸運というべきであろう。しかし、前回、特
に入手したいものとして挙げた1)渡部毒楼(善
助):発見王野口英世。伊藤出版部, 1921; 2)小林
栄:野口英世の思出。岩波書店, 1941; 3)奥村鶴
吉:野口英世。世界伝記全集40。講談社, 1956;
4)Plesset, I. R.: Noguchi and His Patrons.
Associated University Presses Inc. 1980の4冊
のうち、最後の1冊しか得られなかったのは残念
である。神奈川歯科大学の中村澄夫氏は昨年(1988
年)の夏、札幌の古書店において、2)小林本を発
見されたとのことで、同年10月17日に松本歯科大
学を訪問された際に、それを見せて下さった。こ
れからでも探せば見つかる可能性があることをご
教示戴いたわけで有難いことである。

冒頭に述べた“野口英世博士ゆかりの細菌検査
室保存をすすめる会”では、会報“ながはま”を
1981年11月9日に創刊し(図111)、現在までに第
15号が発行されている。毎号、野口英世に関する
記事が満載されていて大変参考になる。例えば第
14号(1988年5月21日発行)の18~20頁には、
Ramon F. Lazo S.: Hideyo Noguchi, su Vida y

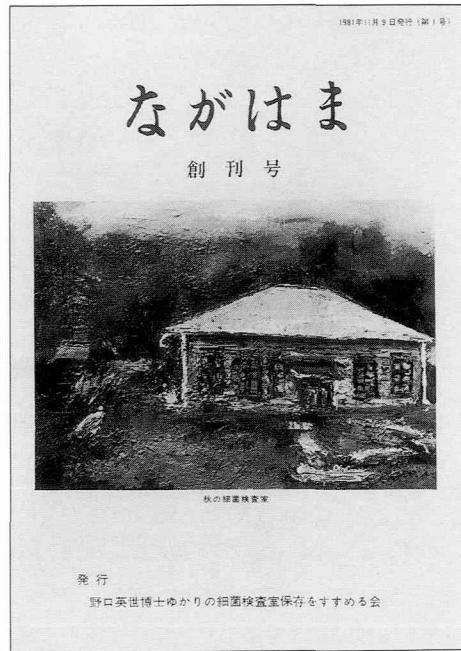


図111:ながはま 創刊号, 1981

su Obra (ラモン・ラソ・S.:野口英世その生涯と
業績), エクアドル, 1985年発行と, Javier Mar-
iategui: Hideyo Noguchi, la Psiquiatria y el
Peru (ハビエル・マリアテギ:野口英世 精神病
学とペルー), ペルー, 1985年発行の2冊の伝記の
紹介がある。両者とも60頁の小冊子でスペイン語
で書かれたものである。われわれはこれらの本も
入手の手配をしているがまだ目的を達していな
い。なお著者の1人枝も、“ながはま”14号に小文
を発表している(枝, 1988)。

最後に財団法人野口英世記念会事務局長 関山
英夫氏, 神奈川歯科大学生物学教室 中村澄夫氏
および野口英世博士ゆかりの細菌検査室保存をす
すすめる会事務局長 小暮葉満子氏のご協力に対し
感謝の意を表する。

参考文献

- 1) 矢ヶ崎 康, 加藤倉三, 枝 重夫, 1987: 松本歯
科大学所蔵の野口英世の伝記。松本歯学, 13(1):
1~34.
- 2) 枝 重夫, 1988: 野口英世の伝記や切手を蒐集す
る。ながはま, (14): 6~7.